紹　介

赤松俊秀校註
隔　蓂　記　第一

本書は、いうまでもなく近世初期の京都鹿苑寺（金閣寺）住職鳳林承章の日録である。一昨年来、赤松俊秀教授の手により、野間光辰教授及び京大大学院学生有志の協力を得て刊行の準備が進められていたが、この程第一巻の上梓をみた。

鳳林承章の事蹟と本書の史料的価値については、今さら紹介するまでもないかと思う。日録は寛永十二年承章四十四歳より、寛文八年七十六歳、遷化のわずか二ケ月前まで、三十余年にわたつて殆んどよどみなく書記され、三十巻の多きに達する。その内容は、承章が整備につとめた金閣や庭園についての記録をはじめとして、相国寺・南禅寺など京都禅院の生活や法会、江戸幕府・京都所司代との政治接衝、寺領の経営など、近世禅宗の貴重な記録である。承章は禅僧であるとともに当時第一等の文化人でもあり、洛北に咲いた寛永町衆文化の末期に身を置いた人であるが、この記録は後水尾上皇をはじめとし、近衛信尋、一条昭良その他の公卿、門跡法親王華道の池坊、茶人金森宗和・千宗旦、また俳諧北野会所に集う人々などとの深い交わりを伝え、更には、金閣門前や京都市中、あるいは旅先きでの見聞にもくわしい。かくて本書は単に金閣寺あるいは禅宗の記録たるにとどまらず当時の公家社会の姿を伝え、文芸はじめ茶道、華道などの文化史また風俗史などの貴重な史料でもあり、鹿苑寺に原本を、史料編纂所に写本を存するものの、久しく刊行上梓を待望されていたものである。それだけに、今ここに赤松教授はじめ関係者一同の努力が実を結んで刊行された意義はまことに大きなものがあろう。なお、本書は鹿苑寺の自費刊行によるものである。かかる学界に稗益するところ大きい記録を上梓された英断に敬意を表したい。とともに、これを先駆として、なお数多い未公開記録史料刊行の機運が醸さんことを、期待するものである。

さて刊本隔蓂記は、自筆原本を底本として校正最も厳密であり、詳細懇切な頭註・傍註および句読点が施されている。全六巻の予定で（第一巻は寛永十二年より正保二年まで）今後逐次刊行して一両年で完結し、最後には索引年譜を附する予定と聞く。こうした編者の利用に便ならしめる為の数々の配慮によつて、本書の史料的価値は一層高まるといえよう。全巻完結の一日も早からんことを祈念する次第である。（A5版　七七〇頁　鹿苑寺発行　非売品）

（熱田　公）

（なお、史学研究会では、特に会員の便宜をおはかりして本書希望の方にお取次いたします。頒価実費二、〇〇〇円送料八〇円）

平岡定海著
東大寺宗性上人之研究
並史料　上巻

本書は故大屋徳城博士の遺稿「宗性上人年譜」を、平岡定海氏が増補校訂し、巻末に「宗性上人の生涯について」と題する解説を附して公刊されたものである。大屋博士が奈良・京都の寺院経蔵や金沢文庫などから多くの古文書・経論・典籍を発見紹介し、日本仏教史上数多の卓見を示されたことは周知のところであり、名著「寧楽仏教史論」「日本仏教史の研究」始め多くの著書を遺された。宗

性の学問的研究も全く大屋博士に始まる。東大寺では平岡定海氏を中心に宗性上人研究会が作られ、博士の遺稿を増補して、謄写版の「宗性上人関係資料集（年譜）」を逐次刊行中であつたが、新たに文部省の出版助成金の交付を受けて今回の出版を見たのである。平岡氏は現在東大寺図書館主事として東大寺史の研究に秀れた業績をもつ人であり、氏の努力によつて本書が出版されたことは、慶びにたえない。

宗性は鎌倉時代における南都東大寺の華厳教学の指導者として注目すべき僧である。島地大等氏は日本仏教教学史の中で、宗性の教学の特色として、華厳学、殊に賢首と清涼の華厳学に関するものが多いこと、倶舎論明思抄を著したこと、僧伝研究を始めて行つたこと、法華経上宮王義疏抄を著して三経義疏研究に始めて着手したこと、春華秋月抄草を著し、また倶舎・唯識・成実・十地論等の教学比較を行つたことなどを列挙されたが、宗性のこれらの業績は、その弟子凝然にうけつがれて見事な大成を見たのであつた。凝然を南都教学の大成者と見做すならば、当然宗性はその基礎を築いた碩学として重視されねばならないことは多言を要しない。「宗性権僧正は近代の名哲也、智弁縦横、弥天の徳を把し、難清雅、経国の量を播す、華厳・因明・倶舎・法相皆悉く研究し、精詳ならざる無く、諸宗の奥旨兼ね暢べて遺す無し」という凝然の宗性評は、弟子の師に対する礼讃ばかりでなく、宗性の偉大さをよく示していると言つてよい。宗性は凝然の師として看過し得ないと共に、深く貞慶・明恵に私淑し、熱烈な弥勒信仰に生きたという点でも鎌倉仏教史上特に注目される。彼が多数の自筆著書を遺し、その点では充分な研究素材がありながら従来殆んど研究がなされなかつたのは、その正確な年譜が知られていなかつた為でもあつた。その意味からも本書の刊行を契機として、宗性研究の深化が期待される。

本書は宗性の年譜で、大日本史料の体裁に準じ、綱文を立て、関係史料が掲げられてある。年譜であるから、もし宗性の教学の具体的検討を志すならば、直接原典に当らねばならないが、その為には史料に東大寺図書館の架番号を附する配慮がはらわれている。上巻は嘉禎三年宗性三六歳までが収められ、中心をなすものは、最勝講問答記・法勝寺御八講問答記・維摩会問答記などの問答日記である。春華秋月抄・弥勒如来感応抄などの大部のものは奥書をのみ示してある。

宗性の著書には裏文書を有するものが多く、本書にも宗性が父藤原隆兼から相伝した遠江国榛原郡質侶庄関係の文書が収められている。その他のものは、直接宗性と関係がないので省略されているが、堀池春峰氏の編纂に係る東大寺遺文第八巻には建保三年から承久元年十月までの宗性自筆本の裏文書が収載されているから参照されるとよい。下巻の速かなる出版を祈つて紹介の筆を擱く。（A5判五四四頁　日本学術振興会発行　定価一、六〇〇円）

（石田善人）

京都大学国史研究室編
日本近代史辞典

このたび、京都大学国史研究室関係の近代史研究者の手により、「日本近代史辞典」が編集・刊行された。

幕末嘉永・安政期から現代（第二次岸内閣）までの、政治・経済・社会・文化の全般にわ